

37 天然秋田スギ（シボ）試馬谷地の生育状況について

大鰐営林署 松田清人

1 はじめに

「シボ」は北山スギ天然絞丸太が有名である。

「シボ」というのは、木部の形成に際して特殊な原因によって生じた波状年輪が樹幹の外観に凹凸となって現れているもの。

また、「杻」は、繊維の錯綜、放射組織や道管の不整配置・列波状年輪によって縦断面に現れた装飾的紋様をもっているもの。

(H. 2. 10. 1, 東北林木育種場 育種専門官所見)

「シボ」, 「杻」とも、床柱や家具・装飾材として木材工芸上特殊な価値を有し珍重されている。

当署では、昭和60年に「シボ」形質を有する天然秋田スギ2本を発見し、この個体の増殖を図るために、営林局を経由して東北林木育種場（現林木育種センター東北育種場）に増殖依頼を行った。

同年5月に採穂したものを、東北林木育種場では4年かけてつぎ木増殖し、これを三本木署でさらに3年養苗したうえ、平成4年5月に当署造林地内に定植した。

今回はこれまでの経過と生育状況について発表する。

2 これまでの経過

(1) 親木の発見及び所在地

親木の発見は昭和60年であるが、地元の人達は以前から「うずら木」という名称で所在はわかっていたようである。

発見時2本とも隣接して成立してあったが平成3年に風害により転倒し現在は1本だけ現存している。

所在地は、大鰐町大字早瀬野字西虹貝山国有林64林班れ小班内（保護樹帯）に位置し、平成6年5月の測定では、標高約500m, 土壌BD, 傾斜28°, 方位SE, 樹高約30m, 胸高直径58cm, クローネ径約5m, 生枝下高約25m, シボ発生高0m~約25mであり、樹令は不明であるが隣接木から推察すると150年位は経っていると思われる。

(写-1 参照)

(2) 養苗の経過

東北林木育種場においてさし木、つぎ木の方法で増殖計画が立てられ、昭和60年5月に採穂し、東北林木育種場でさし木150本、つぎ木176本を増殖した。

さし木苗は昭和62年10月までに全本数枯死したが、つぎ木苗は昭和63年10月現在で65本の活着がみられた。

その活着したつぎ木苗木65本のうち、50本を平成元年4月から平成4年5月まで三本木署においてさらに養苗し、その後、39本を当署で造林地に定植した。

(写-2 参照)

(3) 苗木定植所在地及び植栽方法

定植地は西虹貝山国有林76林班い2小班内に平成4年5月15日植栽した。

植栽方法は、3m間隔の方形により実施し、標高約240m、土壌BE、傾斜3°植栽面積は0.038HAである。

また、植栽時の苗木の平均苗高は、約150cm、地上高30cmの平均直径は、約1.6cm程度であった。

現在の植栽木の状況は、定植したとき添え木を行ったが、冬期に雪圧で折れたもの、また、つぎ木部位の癒合が悪い苗は台木よりぼう芽が出て個体の成長を妨げているものもあり、健全木とはなっていないため、採穂計画はあるものの、まだ、採穂出来るまでには至っていない。
(写-3 参照)

3 調査結果

平成6年10月に調査したものであるが、現存本数の25本の個体について、樹高、地上高30cmの直径、伸長量を測定した結果、平均樹高は175cm、平均直径は3cm、平均伸長量が25cmという結果になった。

平均伸長量は1年間で25cmであり人工スギに比べ天然スギのためか成長がおそい感じである。

親木は前述したとおり、1本が平成3年に風害により転倒したので、平成6年10月に材の様子を知るために、試験挽を行った結果、極端な「玉杻」にはなっていなかったが、明らかに「杻」を形成しており、「杻」を利用しての木材工芸品や装飾品等用途によっては特殊の価値を有するものであり興味のあるところである。

当署では、この「杻」を利用した表札を制作しており、お客の反応を見ることにしている。
(写-4 参照)

4 考察

定植してから2年より経っていないため結果を求めることは早計であるが、人工スギや他の天然スギの稚樹と比較しても明らかに、葉の色、葉の長さ、樹幹の色等が異なり独自の特徴を示している。

今後どのような生育過程をたどるのか推測がつかないが、これを台木として採穂を行い、さらに増殖を図り、親木の遺伝を引き継ぎ、銘木として、また珍木として、貴重品として世に出ることを念願しこれからも引き続き生育状況を観察していくこととする。



写 - 1 天然秋田すぎ「シボ」親木



写 - 2 定植した「シボ」



写 - 3 定 植 地



写 - 4 試 験 挽 板 「 シ ボ 」